

中国 中口国境の街

すが 須賀 つとむ 努

コラムニスト・アジアウォッチャー

真冬の2月、中国最北端と最東端の中口国境の街を2つ訪れた。自分でも物好きだな、と思うほどの厳冬期、最北端の街、^{モウハア}漠河では夜明け前に零下37度の世界を体験し、どうしてこんな寒い所に住む人がいるのだろうと率直に疑問に思った。今回は中口国境の街の状況をレポートしてみたい。

驚くほどきれいな街 漠河

ハルビンから飛行機に乗り、黒河経由で約3時間、中国最北端の街、漠河に到着すると、人口僅か6万人の街とは思えないほど、街並みが整然としており、まるできれいな計画都市のようで驚いた。ここは1987年に史上稀に見る^{ダアシアンリン}大興安嶺火災という大火で、街の全てが焼かれたという歴史があった。実はまさにこの大火災の時、筆者は大興安嶺の南をハルビンから^{マンジョウリ}満州里に向かう列車に乗りこんでおり、車掌からこの話を聞いて仰天したことを今でも鮮やかに思い出す。

元々この付近は清朝末期に金鉱山発見で栄え、かなりの人が集まったが、その後廃坑となり、林業中心のささやかな街となっていた。大火災の後、中国政府は辺境防衛の必要上もあり、資金を負担してこ



写真1 漠河 ロシア国境の河

のような整然とした街を意図的に作ったと思われる。その林業も近年の森林伐採禁止の波にのまれ、今年つい

に全面伐採禁止が発令され、街は大きな方向転換を迫られていた。林場と呼ばれる共同生産単位では、キノコ栽培に乗り出すなど、他の生きる道を探しているところだった。

北極村、と名付けられたリゾート開発もその1つ。中国最北端を売り物に観光客誘致に乗り出したが、ハルビンからでもかなり遠く、ロシア側には直接繋がっていないことなどから、集客には苦戦しているようだった。河を挟んで対岸がロシアなのだが、ロシア側は観光にも貿易にもそれほど積極的ではないという。この付近でロシアと交易があるのは、基本的に中国側が石油を輸入する場合であり、活発な物資の移動などは見られない。

ただこの街に住むある幹部の『我々はここで暮らしているだけで価値がある。ここにいるだけで国に貢献している』との言葉が印象的だった。辺境での『実効支配』は軍隊の駐留だけではなく、『そこに自国民が住んでいる』ことが大きなポイント。ロシア側は常に中国人がロシア領に入り込むことを恐れているが、それは極東ロシアには人口が僅か600万人しかないことが大きく影響している、との指摘もあった。

半年しか開かない口岸

一方中国最東端の^{フウユエン}撫遠、こちらも冬場は飛行場すら閉鎖されるロシア国境の街。ハルビンから17時間列車に揺られてようやくたどり着いたが、途中には満蒙開拓団が入った地域が点在し、良くここまで来て開拓したものだ、と感慨深いものがあった。漠河



【須賀努氏のプロフィール】

東京外語大中国語科卒。
金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。
現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。



撮影：佐渡多真子

に比べれば暖かいと言っても零下20度台の気温、冬は堪えたことだろう。



写真2 撫遠 移住農民から話を聞く

黒龍江とアムール川に挟まれた撫遠は、ロ

シアのハバロフスクから65km、夏は船で多くのロシア人が訪れると聞いたが、冬場は河が凍結し、口岸も閉鎖。関係者によれば『世界でも半年しか開いていない国境はここだけだ』そうだ。

その夏場も観光客が訪れるのではなく、どうやら『運び屋』と呼ばれる人々が、依頼された荷物を運ぶために来ているらしい。極東で物資が不足しているロシア側は雑貨や食料品など中国製品が欲しいのだが、ロシア側で中国人に商売を許すと、じわじわと中国人口が増えることを前述のとおり、極度に警戒しているらしい。それで仕方なくこのような形式を黙認している節がある。

中国農業の一端を垣間見る

この撫遠からさほど遠くない街に行った時のこと、たまたま一人の農民から話を聞くことが出来た。驚いたことに彼は地元民ではなく、ハルビン近くの農村から2年前に移り住んで農業をしているのだという。何故移り住んだのかと聞くと『この村の幹部が農業の労働者を探しに来たから』と言われ、そんなことがあるのかと驚いた。

普通に考えれば大都会ハルビン近郊の方が、農村も豊かではないかと思ってしまうが、農地をそれほ

ど持たない、または全く持たない農民もおり、彼らの中でやる気のある人間をこの辺境にスカウトしてくることは、一種の国策であろうか。国境近くでは当然、様々な優遇制度が採られており、広い土地も確保できる。

先ほどの農民は『確かに以前より広い土地を耕し、収入も格段に上がった。昨年の年収は10万円ぐらいになっている。これから学校へ行く子供たちの学費が出せるのではないか、出来れば大学まで行かせたい』と淡々と話していた。

だが、優遇制度の話をする『確かに農業機械などを買うと補助金が出るのだが、それは我々雇われ者の懐には入らない。全ては村の連中が持って行く』と半ばあきらめ顔になる。そう、村では困っている農民に土地を貸し与え、地代を請求した上で、農機具など優遇がある物は全て自分たちの名義で購入して、代金を払わせ、優遇部分を自分たちの利益として持って行く。全く働かないで、相当の収入を得ているのが実態のようだ。完全なる地主と小作の関係が見られた。

またあるところでは『農業をやるのであれば中国ではなく、ロシアの方がいい』との話も出ていた。人口不足のロシア側は食料調達も中国に頼るよりは自前で作りたところだ。だが中国人農民を大量に受け入れることへの恐怖感はこちらでも根強く、またモスクワの中央政府とこの付近の地方政府の考えも一枚岩ではないとのことであり、ことはそう簡単ではない。

いずれにしても今回の旅では我々島国の人間にはなかなか実感できない、国と国が接していること、『実効支配』の意味を考えさせられることとなった。